



TITLE:

鼠径部に流注膿瘍を伴った幼児腎結核

AUTHOR(S):

加藤, 篤二; 小林, 宏暢

CITATION:

加藤, 篤二 ...[et al]. 鼠径部に流注膿瘍を伴った幼児腎結核. 泌尿器科紀要 1970, 16(8): 369-370

ISSUE DATE:

1970-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121153>

RIGHT:

鼠径部に流注膿瘍を伴った幼児腎結核

京都大学医学部泌尿器科学教室

加 藤 篤 二

小 林 宏 暢

RENAL TUBERCULOSIS WITH INGUINAL GRAVITATION
ABSCESS IN A CHILD

Tokuji KATŌ and Hironobu KOBAYASHI

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

A 5-year-1-month-old boy was admitted because of nonfunctioning renal mass on the left side. Nephrectomy revealed advanced renal tuberculosis associated with gravitation abscess in the inguinal area arising from the upper ureteral fistula.

はじめに

幼児の腎結核はめずらしいが本例は5才1カ月の男子で左腎を侵した興味ある症例であるのでここに記載する。

症 例

患者：5才1カ月の男子（1961年12月15日生）

初診：1967年1月25日

主訴：左腎部腫瘍

家族歴：結核あり

現症：1967年来、頻尿と混濁尿とときに夜尿をきたし某病院に入院、左鼠径部リンパ節が腫脹し、ときどき化膿したという。当時左腎結核と診断されたことがある。1967年本院小児科に入院、諸検査を受け、とくに排泄性腎盂撮影で左側が無機能腎であることが判明した。よって左腎腫瘍として泌尿器科に転科した当時は頻尿があるほかはとくに異常はない。マントー反応（±）。

所見：体格中等度、栄養佳良、体重 20.2 kg、貧血はない。全身リンパ節腫脹なし。胸部、肺心ともに異常なし、腹部で右腎は触れず左腎は腫大して下縁は臍下2横指に至る。表面は平滑、圧痛はないがやや硬く、呼吸性の移動がある。膀胱部、外陰部は包茎のほか正常、左鼠径部にエンドウ大の痂皮を形成し周辺は発赤するもリンパ節らしい腫大はない。尿は軽く混濁し顕微鏡検査では白血球（++）、赤血球（-）、膀胱鏡

検査で膀胱粘膜は全く正常でいずこにも結節、潰瘍はみられず逆行性撮影を試みるに左尿管口よりはカテテルはいらず、よって排泄性腎盂撮影を試みるに7分、15分で右側の排泄は良好なるも左側はまったく排出がない（Fig. 1）。左腎臓部に直接刺入の腎盂撮影を試みるも造影剤はいらず、血液像では、赤血球3,240,000、白血球12,340、Hb 68%、PSP 15分 43%、30分 63%、60分 73%。以上左腎部腫大で膀胱には結核病変なく鼠径部の痂皮を重視せずして2月2日腎摘出手術に移った。手術は経腹膜的に気管内麻酔のもとにおこなわれた。まず腎動脈、静脈を結紮切断した。腎両極は剥離が容易でそのさい周辺に数個のリンパ節腫脹を認めた。腎周辺を剥離して腎盂尿管を追求するに腎下局より3 cmの尿管に瘻孔が形成され、左鼠径部の痂皮部よりゾンデをしいて挿入すると瘻孔部との間に交通のあるのを知った。すなわち流注膿瘍であることがわかりそれで尿管はなるべく下部で切除、腎を創外に摘出しドレーンを挿入腹膜縫合について筋肉、皮膚を縫合して終った。術後、2月2日腸閉塞の疑いありNPN 41.06 mgであったので再開腹したところ腸管に軽い捻転があったので整復のうえ創を閉じて終った。術後は順調で退院した。摘出腎はFig. 2のごとく重量 380 g、14 cm×9 cm×6 cm。剖面をみるに腎はほとんどまったく空洞化して緑色の膿で満たされ末期化膿腎で被膜も強く肥厚していた。組織学的には巨細胞を伴った定型的な結核腎の所見であった。

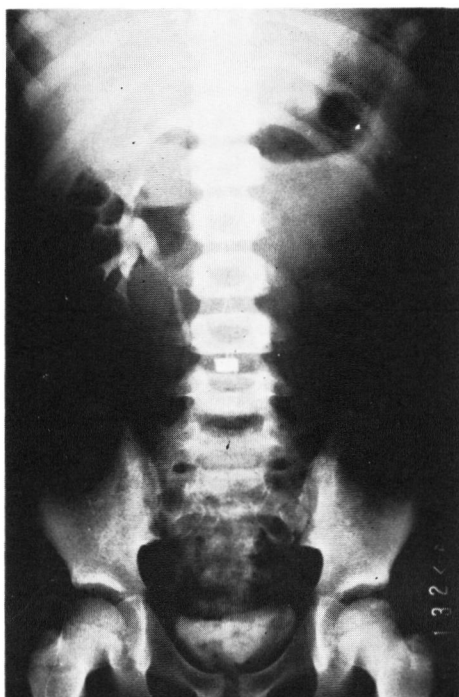


Fig. 1

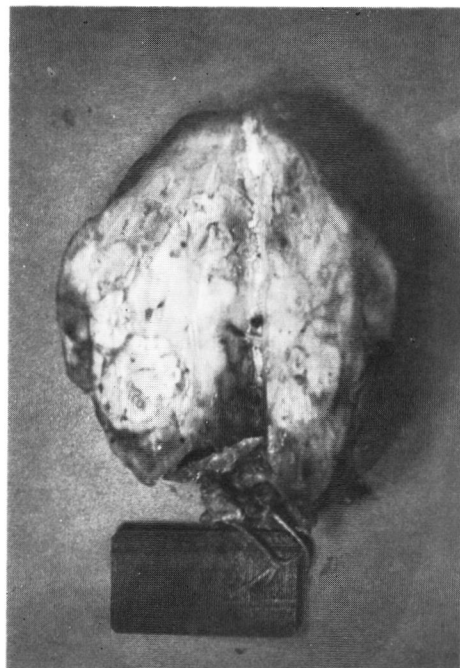


Fig. 2

ま と め

以上本例は5才1カ月の幼児で巨大な腫瘍をおもわす左腎末期結核で尿管上部から流注膿瘍の形で左鼠径部に交通のあった症例である。まず第1に幼児の腎結核ははなはだ少ないもので本教室の多田の統計では2,439例中10才以下が31例であるが多くの8才以上でうち4才が2例、5才が1例でこのうち4才(男子)は摘出手術をした。そのご大森の5年間の332例では10才以下は1例のみである。今これを本邦文献によると岩下の北海道大学統計では10才未満が3例、6才までのもののうち本邦手術例は植田の2年4カ月(男子)、高橋の2年5カ月、新藤の3年1カ月、檜原の3年6カ月(男子)、川島の4年4カ月、鈴木5年7カ月(男子)、滋野の5年10カ月(女子)以上7例に過ぎない。かくのごとく小児結核に比して幼児結核ははなはだ数が少なくことに5才以下で摘出した

例は少ないがそのさい粟粒型が多いといわれる。かつ幼児結核は免疫力の低下のため予後が成人に比して悪い。成因的にも家庭感染が多いといわれる。第2には比較的に抵抗力の強いといわれた尿管上部から流注膿瘍の形で左鼠径部に交通したことで術中はじめて証明しえたがわかることははなはだまれでかつ興味がある。

文 献

- 岩下・山田：日泌尿会誌，23：469，1935.
- 川島：日泌尿会誌，30：425，1941.
- 新藤：皮泌尿誌，47：165，1940.
- 鈴木：皮泌尿誌，30：263，1930.
- 滋野：皮泌尿誌，37：909，1935.
- 植田：日泌尿会誌，20：534，1931.
- 檜原：臨床泌尿誌，5：174，1951.
- 多田：泌尿紀要，1：1，1955.
- 大森：泌尿紀要，5：293，1959.

(1970年7月25日 特別掲載受付)